

モード Mode は語る

中野 香織

6月のテニス全仏オープンにおいて、セリーナ・ウィリアムズの黒いキャットスーツが議論を巻き起こした。フランステニス連盟のベルナール・ジウディセリ会長が、「選手は試合と場所に敬意を払わなければいけない」と発言、来年以降は体に密着したキャットスーツを禁じるドレスコードを発表したのである。

ウィリアムズは昨年、第1子出産の際に血栓ができて命の危険に陥り、キャットスーツも血栓予防で着用していた。多くの観客の目にはブラックパンサーのようなスーパーヒーローのスタイルに見えたはずだが、古い家父長的な視点から見ると「度を越している」らしかった。

女性選手の装い

「度を越した」先 活躍の時代

その後の全米オープンでは、アリーゼ・コルネが、シャツを前後逆に着ていたと気づき、ベンチで脱いで着直した。この行為に対し、主審は規則違反として警告を与えた。上半身裸でベンチで休憩している男性選手はおとがめなしなのに。これは性差別だとしてペナルティーは科されなかった。

女性選手は「女らしく」装い振る舞え、という旧時代の家父長的なコントロールはバドミントンにおいてもみられた。2011年に世界バドミントン連盟が、女性選手は「魅力的に見せるため」スカートかワンピースを着用と定めたことがあった。これは世界中から反発された。



キャットスーツを着るセリーナ・ウィリアムズ＝ロイター

ビジネスにおいても、女性は男性社会の視点から好ましく見えなくては行けないが、あまりにセクシーでも嫌われる。政治の世界でも、女性らしさは決して失ってはならないが、色気がありすぎると信用されないという。女性は男性を不快にさせず脅威も与えない、ほどよい中間にある「女らしさ」を求められ続けたのだ。

ウィリアムズは全米オープンでは一転、バレエの衣装であるチュチュを着て戦った。スーパーヒーローであろうと超フェミニンなバレリーナスタイルであろうと圧倒的な強さを見せつけて勝利した。「ほどよい中間」などに気をとられては能力の解放などあるはずもない。女性たちが熱狂のうちに「度を越した」向こうに、本物の「女性の活躍」の時代が待っている。(服飾史家)